

音楽遍歴

小泉純一郎



日経プレミアシリーズ

小泉純一郎 こいずみ・じゅんいちろう

衆議院議員。元首相。一九四二年生まれ。
慶應義塾大学卒。ロンドン大学に留学。
七二年衆院選初当選。二〇〇一年自民党
総裁に選出され第八十七代内閣総理大臣
に就任。〇六年退任。クラシック、ポッ
プスを問わず音楽、芸術全般に造詣が深
い。エルヴィス・プレスリーやエンニオ・
モリコーネのコンピレーション・アルバ
ムの企画・監修も手掛けた。

日経プレミアシリーズ 001

音楽遍歴

二〇〇八年五月八日 一刷

著者 小泉純一郎

発行者 羽土 力

発行所 日本経済新聞出版社

<http://www.nikkeibook.com/>

東京都千代田区大手町一―九―五 〒一〇〇―八〇六六
電話 (〇三)三二七〇―〇二五一

装幀 ベターデイズ

印刷・製本 凸版印刷株式会社

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

© Junichiro Koizumi 2008

ISBN 978-4-532-26001-9 Printed in Japan

読後の感想をホームページにお寄せください。

<http://www.nikkeibook.com/bookdirect/kansou.html>

音楽遍歴

江苏工业学院图书馆

藏 泉純一郎 书 章



日経プレミアシリーズ

目次

I クラシックとの出会い……

9

ヴァイオリンを始めた十二歳 11

最初に手掛けたのは「おもちゃの交響曲」 13

「なんてきれいな曲なんだ」 16

何回も聴いて良さがわかるのがクラシック音楽 18

ブラームスはわからなかった 19

驚くべき才能の持ち主バガニーニ 21

モーツアルトで百人一首 24

ハイフェッツを聴いて自分のへたさかげんにがっかり 26

バッハとヴィターリの「シャコンヌ」 30

フィンランドの風景と合致しているシベリウス 32

全集集めたいエルガー 34

要は自分に合うか合わないか 37

批評家は感情的な演奏を好まない 39

いでよ、作曲、編曲ができるヴァイオリニスト 41

BGMで聴いて広がったレパートリー 45

音楽の好みは押しつけないほうがいい 46

「音学」より「音楽」を 49

今はレコードの解説も読まない、オーディオにもこだわらない 50

オーケストラの指揮者と首相はまったく別のもの 52

まだまだ聴いていない良い曲がたくさんある 54

わかりやすい曲から入ろう 56

アンコールへの注文 57

II オペラは愛である 59

人間業とは思えなかったマリオ・デル・モナコ 61

最初は理解できなかった「トリスタンとイゾルデ」 63

オペラにもいろいろあることを知ったロンドン時代 65

物語の筋がわかればもっと面白くなる 67

最初はイタリア・オペラが入りやすい 69

オペラが表現するものは「愛」 70

「言わぬが花、聞かぬが花」 73

ワグネルは序曲から入ろう 74

バイロイト音楽祭での出来事 76

ヒトラーを氣にしたシュレーダー 78

音楽自体に罪はないが 80

名声を確立する前のほうにいい作品がある 83

主演の二人が抱擁しなかった理由 85

演目選びは難しい 87

いきなり生のオペラを観る前に 89

歌舞伎「勸進帳」こそ日本の傑作オペラ 91

忠臣蔵も「うそ」がポイント 93

歌舞伎とオペラの共通点 96

千両役者のすごさ 98

日本のオペラとオペラハウス 101

読み替え演出はやらないほうがいい
初心者におすすめの作品 102
104

III エルヴィス、モリコーネ、そして遍歴の騎士……………107

F E N から流れてきたエルヴィスの歌声 109

言葉にしにくいエルヴィスの歌のうまさ、独特さ 111

パット・ブーンとペレス・プラード 113

熱烈な愛情表現の三連発 115

エルヴィスの聖地で歌う 117

突然、ある音楽に引き込まれる 120

マイ・フェイヴァリット・モリコーネ 121

X J A P A N もバラードが好き 123

私のカラオケレパートリー 125

国会議員はカラオケが必須科目 127

歌と踊りは世界共通 128

いつも口ずさんだ「見果てぬ夢」 129

オペラより敷居が低いミュージカル 132

新たな遍歴の旅へ 133

(注釈は日本経済新聞社編集委員・池田卓夫)

謝辞

作曲家と主な作品

演奏家の横顔

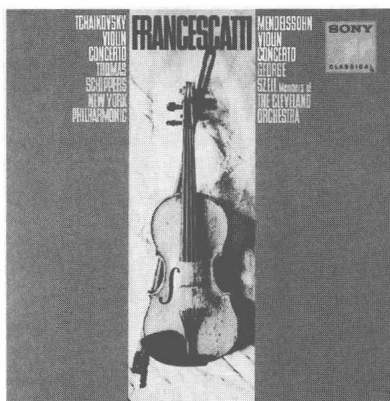
「私の好きなエルヴィス」著者解説

「私の好きなモリコーネ・ミュージック」収録曲一覧

希代の政治家による音楽談義 池田卓夫

I

クラシックとの出会い



著者が初めて購入したクラシックレコード「メンデルスゾーン&チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲」と同じ、ジノ・フランチェスカッティ演奏のCD(ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル)。著者が実際に聴いたディミトリ・ミトロプーロス指揮によるレコードは日本国内ではCD化されていない。

ヴァイオリンを始めた十二歳

私は音楽が好きだ。私の人生は音楽と切り離せない。

私がクラシック音楽と親しむようになって優に半世紀以上になる。

クラシック音楽との最初の出会いは中学に入ってからだった。十二歳。昭和二十九年だった。

当時私は、神奈川県横須賀の市立馬堀中学校に通っていた。現在防衛大学校が建っている小原台の下にある、埋め立て前の馬堀海岸に面していた。入学したところ、音楽の先生がたまたま小学校のときの先生だった。

当時は公立の中で小学校から中学校への異動もあったんだろう。まさかこの先生がいらっしゃるとはまったく思わなかった。それで「ああ、小泉君か」と。小上馬朋治先生という名前だった。

先生は兄弟で教師をなさっていた。弟さんが確か数学、お兄さんが音楽、とても熱心な

先生だった。

その小上馬先生から「この中学にオーケストラをつくりたい。小泉君もぜひとも参加しなさい」と誘われた。私が「何も音楽を知らない」と返すと、「ヴァイオリンを教えてやる」っていきなり言われた。

それまでヴァイオリンなんて、手にしたこともなかった。どうして私が誘われることになったのか、今でもよくわからない。

結局、先生の熱意に打たれたのだろう。小学校時代の先生という気安さと、小上馬先生の音楽への情熱に打たれたんだと思う。

やってみようかな、って気にさせられてしまった。

まず先生は、子どもたちがまったく手にしたことがないヴァイオリンを弾いてみせた。唱歌とか、子どもたちが比較的知っていそうな曲をヴァイオリンで弾く。子どもたちは聴いているだけ。

でも、だんだんとオーケストラができるだけの人数が集まってきた。

練習を始めても、最初はみんなまったくできない。初めは誰も管楽器なんか買えないから、オーケストラといっても弦楽合奏だけだけれど、ヴァイオリンもチェロも誰も弾けない。

どうやったんだろう。少しずつ、できるところから始めた。

ヴァイオリンが主でチェロ、ヴィオラが少々。四、五十人は集まっていた。あとは先生がピアノも弾いた。

先生の主要な任務は指揮。たぶん指揮者にあこがれていたんだと思う。練習を重ねていって少しずつヴァイオリンを弾けるようになってくる。

それで、先生はいきなり発表会をやるという。それで発表会のためにまた、もっと熱心に練習するようになった。

最初に手掛けたのは「おもちゃの交響曲」

最初に手掛けた曲はハイドンの「おもちゃの交響曲」だった。この曲の作者は今日では

ハイドンではないというのが定説だそうだが、私にとっては「ハイドンのおもちゃの交響曲」〔注〕だ。

注1 長くフランツ・ヨーゼフ・ハイドンの作とされたが、最初から疑いを持たれ、弟のミヒャエル・ハイドン、同時代のヴァルフガング・アマデウス・モーツアルトの名も取り沙汰された。二十世紀半ばの一九五一年、旧西独のバイエルン州立図書館で発見されたモーツアルトの父、レオポルドの楽譜の一部が「おもちゃの交響曲」と一致したため、以後はレオポルド・モーツアルト作曲が定説とされてきた。ところが九二年、オーストリア・チロール地方のシュタムス修道院の蔵書から、一七八五年前、神父が写譜した「おもちゃの交響曲」の楽譜が見つかった。そこにはチロールの作曲家でベネディクト会の神父、エドムント・アングラーが「一七七〇年ころに作曲した」と明記されていた。現在までのところ、これを覆す新しい材料は出現せず、アングラー作曲説が最有力とされている。

こればかり何回も練習して、結局、演奏会でやるところまできた。

次はモーツアルトのセレナーデ「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」。これを演奏したのをよく覚えている。

それから、J・S・バッハの「アリア」（通称「G線上のアリア」）。こういう作品は現在でも、演奏会でよく聴く機会がある。でも今はヴァイオリンを弾くことはない。

練習の最中に先生がレコードで本当に良い演奏を聴かせてくれることがあった。

私はどうしてこういう良い音が出せないのか、不思議に思った。

自分は練習していると、ギーギーとか「のこぎり」をひいてるみたい」と冷やかされる。ああ、確かに最初はギーギーとのこぎりみたいだった。

ヴァイオリンとは結構な期間格闘した。家でも学校でも一応毎日、少しずつでも練習した。家族もみな音楽好きだから、迷惑とは思っていなかったみたいだ。高校生まで何となく、五、六年は一生懸命やったかな。

とにかくクラシックとの出会いはヴァイオリンだった。しかも楽譜が読めない状態から始めた。楽譜は読めないけれど、五線譜上のドレミファソラシドはわかる。ヴァイオリンには四本の弦があるから、指で押さえるのは一、二、三、四とか、押さえるところくらいの音程はわかる。音符の長さなど、とつくに忘れてしまったけれど。